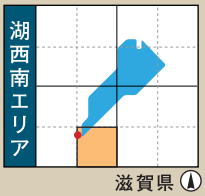
史跡
国指定

近江大津宮錦織遺跡

おうみおおつのみやにしごおりいせき

大津市錦織　昭和54年7月2日指定



大津宮は、天智6年（667）に、中大兄皇子が飛鳥より遷都した宮です。遷都は、663年の「白村江の戦い」での敗戦によって、国内外情勢が揺れ動く中での皇子の断行でした。そして皇子没後の672年、実弟大海人皇子と実子大友皇子との間に起こった「壬申の乱」によって、わずか5年5カ月で廃されました。

当時のできごと	
645年	大化の改新
661年	斉明天皇崩御
686年	天武天皇（大海人皇子）崩御

大津宮について

大津宮は『日本書紀』に、「浜台」「大蔵」「宮門」「朝廷」「殿」「漏刻台」「内裏仏殿」「内裏西殿」「大蔵省第三倉」「新宮」「大炊」「大殿」などの建築物に関する記載がある程度で、その正確な位置や実態は永らく謎に包まれていました。

しかし、昭和49年に大津市錦織で行われた発掘調査によって、ついに大津宮に関する遺構が発見され、その後進められた調査の結果、ここが宮の跡地であると推定されるに至りました。

大津宮の中枢部だったとみられる一帯は、民家が密集しているため、発掘調査は住宅の新築や増・改築の際に断片的に行われており、宮全体の構造が明らかになるのは、まだ先のこととなります。


南門と回廊（右が北）

主な遺構

内裏南門

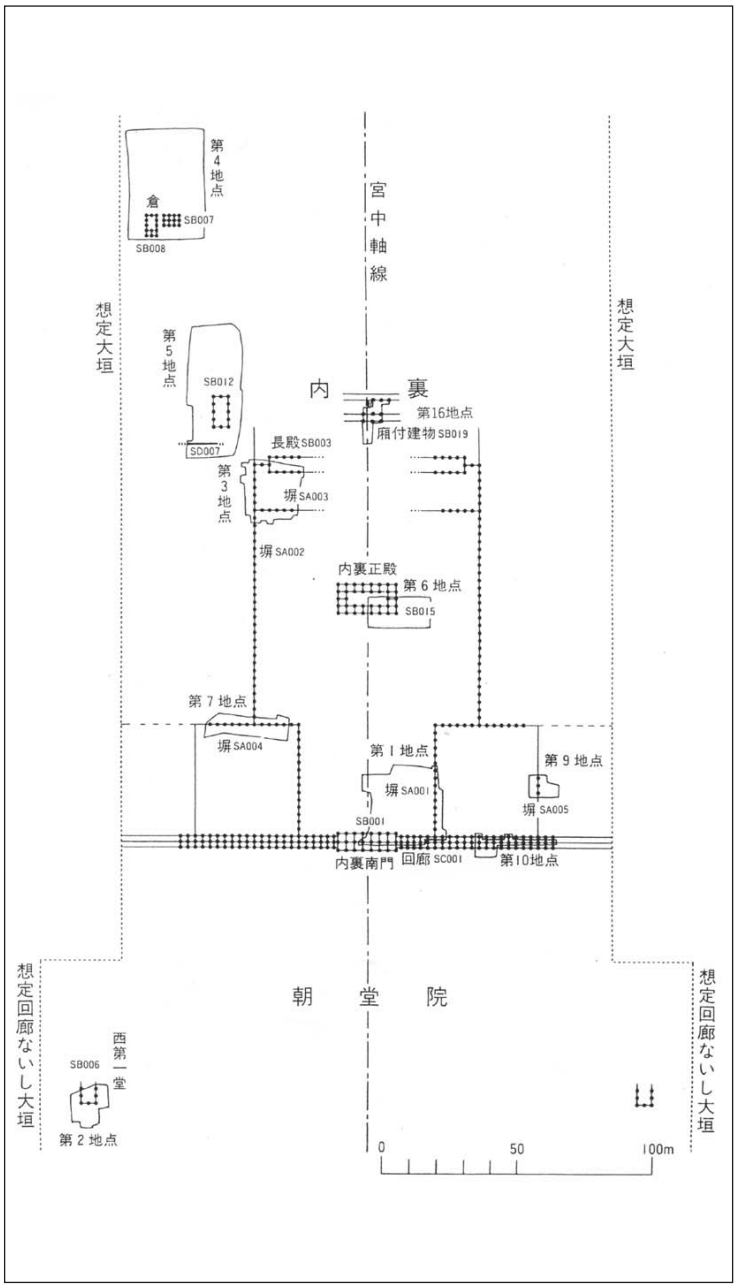
大津宮跡で初めて発見された東西棟の建物です。柱穴は、一辺約160㎝の方形の堀方があり、直径約50㎝の柱が立っていたと推測されています。そこから東に延びる廊状の建物が発見されていることから、この建物は、内裏南門と想定できます。門から東に延びるこの回廊は、門より57m以上続いていることが確認されています。

内裏正殿

昭和58年に検出された掘立柱建物です。宮の中枢部となり、周りに廂が付いた古代では最も格式の高い形式の建築物です。内裏南門より宮中軸線上を約81m北に位置しています。


大型掘立柱建物


内裏正殿跡



大津宮中枢部推定復元図（黒丸は検出した柱穴）

遺跡の特色

大津宮に関連する遺構として、長殿、倉跡、塀跡、溝跡などが検出されています。建物は同一方位で、基本的に真北に対して北1度24分西、磁北に対して北5度6分東の方位になっています。

門の柱抜き取り穴や、石敷溝などから出土した須恵器などは、大津宮時代の特徴を持っています。瓦が発見されていないことから、建物は全て板葺きか檜皮葺きだったと考えられています。断片的に検出された遺構や地形、文献から想定すると、宮室は内裏と朝堂院からなり、東西に対称形に配置されていると考えられます。

この推定復元された大津宮中枢部の構造は、内裏南門と復廊が延びること、内裏南門を入った東西に方形区画があることなど、前期難波宮跡の構造に似ており、前期難波宮を一部変形・縮小した構造とみることもできます。

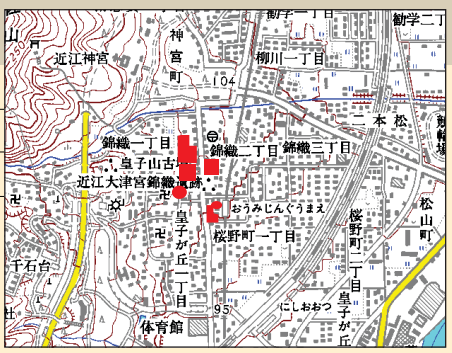
関連する文化財

禾津頓宮（大津市）	聖武天皇の頓宮の遺跡。膳所城下町遺跡と重複する
唐橋遺跡（大津市）	現在の唐橋の上流から発見された、7世紀代の勢多橋の遺構
崇福寺跡（大津市）	学習シートNo.005
南滋賀町廃寺跡（大津市）	学習シートNo.006
藤原京（奈良県橿原市）	694年から710年までの都

もっと深く知りたい

大津市歴史博物館	☎077-521-2100	大津市御陵町2-2
大津市埋蔵文化財調査センター	☎077-527-1170	大津市滋賀里1-17-23
滋賀県埋蔵文化財センター	☎077-548-9681	大津市瀬田南大萱町1732-2

近江大津宮錦織遺跡へのアクセス JR湖西線　西大津駅下車



【参考文献】〔図説日本の史跡〕同朋舎　〔錦織遺跡発掘調査報告書〕滋賀県教育委員会
〔20世紀近江発掘ベスト10展〕滋賀県教育委員会　〔大津の文化財〕大津市教育委員会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月